語林類葉

三

縑洲藏

ホ 2
398
3

[library seal]

水 2

語林類葉巻之五

加行　か の部　二言

清水濱臣輯

かう 鳥声

枕冊子 続詞花

○袖中八十三 鳥のかゝくとはくをハかろくとはくといふ之

○

かく楽

雲ゐにこのし　かくかく白桂○業平　音楽　楽屋ハ中

將にしまり

かご　駕籠

厳嶋詣記　高井のほとりとどまりて　ゆかれにこれも

多く見○

かさ

林葉集一　梅花遠聞

笠やあまたにきて　ぬひぬらん　うきと香ぞ匂る　梅の花笠

カサハ笠ニカサトイフ方言ノオホ○物ノ別

キコヨイ、ヨセタルヤラナリ　サノオ

ホイスリナイトイ○宗川保　花開　さくらかく　カヲ

フサオト同シキカ

○同　同　おてさきて　うきあかく　いますなる

為忠後百　親隆

あひに　花さき　ぬれも市川の流の末の糸さはさみし

○

かぜ

風

山家下廿一　風よりむかる人を

同同風ふきてと云

さそはれし風のまにまに　ぬるるるたもか　かえるを花のへきたに

○同下廿八○業平　とふ世ともいはで○同　同　九四十

あやしう色おもてりちかて ○ 榮花 花山 廿六 みえゝうせ
給ひとさ海〳〵のおほんさうり ○ 狭衣二上 風うおもて給
にるみやこ名もんちまいひして ○ 清慎公集 うき
やうかひて志める〳〵きんちけるを云々 ○ 竹取 風いとか
とき人みてもうついとふるちりうれさの日みいまと
○ みるけつけ侍らやしく ○ 源 宿木 浮世たにかなし
海せえ去とれうこともおもうせんとて
大和物語 風にいんあひかひて君ひきける
あら物のいと何う給とままま風のうけいうさとるるう之けり
コレハ中風 偏
枯ノ症ヲ云カ
夫木廿八 家集雑部中 西行上人
うきみもやの風をもよほふ志の木いおきみかねかにほてしく

后の給
帝の給
親王の給
大臣の給
博士の給
めの給
きさきの給
法親王の給

かい
給料

榮花 さ海〳〵のとらちむ きさき〳〵の給とおほしけえかうと ○
同 同十五 きゆきの給といみしきことにおほしまま ○ 同
こもての菱 廿二 ○ 同 月宴 四十四 みのとの給 ○ 源 廿女
うつふさいさひ人のちしれきさき〳〵の給ちうそ ○ 伊物 十段
むかしの給 ○ 榮花 こともしつくりふあるのの大臣の給かえ
いまん ○ 尚歯會記 たうせの給 侍子のつ皆をゝ家
○ 榮花 浅緑 十八 みのとの給 ○ 宇川保 蔵開 むくさきの
きさみの給かやいあつめ コノキミハ帝ヲイフ ○ 増鏡 烟あと 老七法

親王の孫なりしちゑハこその…まで ○宇津保あて宮
つるかき多かりあひとおもひらめる侍従人かほ せうえん
てかりけんや○

かう

源 紅梅 うちふくみけりにけしきあるさましてこゑ ○弘
安源氏論義云天暦の比の記云宴會の時侍臣
の奥のかたりしてこゑをふくと云て同日の小一条
左大臣記に諸臣かうをふくと有○竹取あるひハ
うそをふき 注可考 ○
新猿楽記云早職事之皮笛

○空穂 ○思ひの情の日記
諸人こゑひきあみて唱歌し給ふさまかうをうちふえふきなと

○
蔓椒（カハシカミ） 呉茱萸（カハシカミ） 並見延喜典薬

かひ

和名抄卵 和名加比古
宇津保あて宮 かひのうちに命こもりたるかりの子ハ
源氏末摘花 かひのうちにうつろひのこえなく…にみえさりけん
拾遺雑恋 いぬかひのかけのかひ… [illegible]

大和物語
まちわびしとおもふ心ハなきものをとうもあるへくもなしとなきけ

後撰雑一　読人不知
またなかなかにかはれるかけつまなれきたる人のありしハかなき海まくらとも

○枕草日記まちうたによめるをとこのかもおもへハうきのある

つきと○

かう　自ノ去

藤くほ一上六八ちうし海かきて

清輔集
ちかひしをおもひかへるの人あまたにこひしきものをかきふきちらせ

○新古春　赤人　あはれしハ若菜つまんと　三云○

ヨリ万八

かしかつれ
かしとりも
かしみ
かしの枝
かしのき
かしのは
かしさえ
かしわ
かしわ

かし葉ナ

拾遺貞外上かしはかれ○新六ときはき　俊実うしとも

き○千載物名かしはきのかしき○同恋四　詞書一つ

うの枝○漂玉かしの枝のかけたしあるうき草しをみ

るまおもへるれ○催馬楽庭にあるかしのかれ

拾遺雑春　長能
雪をとりて塩枝かへつきたるかしわつれなきつきハ海への浜き　冥代

○今昔卅一　五　唐草ノ荻繪ノ唐櫛笥ノ具ヲ立

タリ○恵管抄内大臣伊周人かしや海をみたるくへし

ろうれる人かしさんにとくて詩れといみしとつくらせ

けまくと○李子カウ十三　和　○榛子カ十三　和

頼政集
人ちらあれたる宿の庭におつるかゝおつまらハ庭引さいハ

○源氏 椎の繁みのたしおくうしきをさきも お
まゝもいとかしめきなきも○

三言

かいき　咳気

隆信集恋六　せき　七郎　記ならふ女可考合○葉花　咳う
うちの　ういきれといふ事とせさせなひて○
かくりし　勘事○勘當

葉花　えやし夜つほ　きんかさをおしハかんなのおくぬく
き法りしきにちそ○拾遺雑恋　ゐきしくうんし也
てきこ○枝花一　下一う　ちいうんをしにちそもつくり
○源真木柱　ちえしうしちなふへきみやちらん○同柏木
けかしゆるさきなんけれん○山家下　四十五　うんをう○竹
取りんをしあしもはなうつるをまれ○枕冊子　四段
かくしゆるさまて

かくら　神楽

玉か川吉十　うちいかくへの神あそひき　いつくさもい甚

哥をも 古今集にはかみあそひの哥とそしるされたる神
楽と書ても ふるくはかみあそひとそ訓へきなれと 今も
はいかくらといふもかみあそひのほとよりかはらさるなるへし 六帖の
哥にはかくらといへり○ 神楽の音轉之○ 神遊考に
説あり○

かけし 懸篭
源氏 若菜
まきをみなおきてかけはかけしものをしたゝめかけしこそけり
○枕冊子 九十九 かへりかけしの硯○ 蕪紀 五十一ウ
拾遺恋一 よみ人しらす
君をのみ思ひかけしの玉くしけあけくれことにこひぬ日はなし

金葉雑下 よみ人しらす
玉くしけうけしにちりはまさらしをさそや人しらすかなとをき
○

かけて
拾遺 春
春かけてきかんともおもひしら山にちるらむ花をおもひくれくらし
新勅 鎌倉右大臣
新六 うへて 信実
春かけて葉さきいろはく若楓たちとあしはらをいつとくらん
続古冬
風渡るにはのもみちの志りてみにみなはかけてのちるもみちは
○

かけめ 隨書

枕衣一下十九オ さやうのほそきんなどのうけめにて ハちさき
くりうハ○ 同五上廿六 さやうの絹きんなどのかけめに
てやうれしさて○

かざし 挿頭○ 帖題

花鳥餘情云 石清水臨時祭使ニハ藤 舞人ニハ
櫻 陪従ニハ山吹○ 永久百首 石清水臨時祭哥
花 月詣 雑上 詞書に ○ 江第次二 盃 句拱云
左挿頭呉竹 右款冬

もみぢがさね
松がさね
あやめがさね
卯の花がさね
桔梗がさね
きくがさね
まゆみがさね

万代雑二 揚光妃を 光頼
かさねてもきたりくことにそまる八あをみどりの色のうちしげりけり

○

某(ナニ)かさね
俊成卿女集
紅にちしほやそめし山姫のもみぢかさねの衣手の森
○志のぶがさね上 松がさね○ 枕衣三下十九オ あやめがさねの袂
○同二下十六ウ 注文ハ花かさねのうへにやしるして○
氷重 表白 瑩 ○ 枕衣三中廿三オ 新院の○かさね
裏白 無文
清川でもかさねてまとうし○ 源 若菜下 かさね○
今昔卅一 瞿麦重ノ薄物ノ袙

かしは　古語凡葉皆曰加志波

仁徳紀御綱葉　葉此云箇始婆

万代戀一　前参議宣經
かしはの川いはをかしはのいはてのことわりやさらのいろをうつしぬ

壬二集
かしは川いはとかしはのおちそめのこつまれきいはね流ればみ行

木トナシテヨメリ

堀百　初戀　俊頼
なかれての末にぞ川あらしふくうちあるいまでなに人を恋ちや

千戀一　同

拾遺愚草上
こゝ川なかの清水くとをきれきかしはかたかはいきまもあるかなかな

万代冬　顕昭
漣浪かし月かときけはかしの川いはとかしはは志られふる散り

同神祇　兼和大嘗會悠紀方美濃国風俗寄　ゝゝ人ならは
みの山にしけみおひたるたまかしはとよのあかりにあふりきのしき

コレハ木ナリ　○北史倭國傳曰俗無盤俎藉以槲葉○

仁徳紀三十年通証○神武紀通証八廿九丁　○持統紀三年通証

かたみ　片身

万代秋上　後徳大寺左大臣
かるかしのこまつなきわかれこまち秋してうつゝみとさはまゝ旅衣かな

○

かは川

都土産にかはしく載

万代春
春雨にあさゝの沼にあさりしてうつゝのこしかたを（?）志るらん

○長明無名下五日ゝ川にふく事○余哉可考

万葉
をとめ子しさき沼にわたる花薜かつら川ても志らぬ恋もするかな

古今恋四　とこ人志らは

千載
おくまかとまつらむうちゝやとれまん　うつゝの恋にたもしのふらん

○

かゞて　門出

土佐日記

隆信集下四月

かゐね　峡嶺

万代冬　遠山時雨　藤仲正
風ちやゝ村雨さそく遠方の山のうゑ詠に志ぐれとるらし

○

加布施（カフセ）

散木雑上

かんし　庚申ノ音使之

公任集　九月つごもり日かんし侍るに
めにみえてけりあさ沼ゝ花と沼つゝいふ詠て　何を待る哉らん

○二条天皇太后宮大弐集 うへしの夜あらぬめぐさ
くのりみえて意

一

かや波 萱間。板間とりたに同拾之
万代意一
春られも軒のかや波の夜さき をつけてのどめきそでの手

○

かいく 嬰児産声
四言
業苑 卅五 月宴 みたらいくとひきなふ○定円傑 印さうの鏡下
花な吹上

えゝのきまあつにらいくと鳴○今昔廿七 三四十 赤児ノ音ニテイカイカト笑ナリ 産ヤ子ナリ○

一

開帳（カイチヤウ）
中原康富記云文安元年十月二日梅尾春日大明神御影御帳被開之南都大乗院被所望申被開之此次（ツイテ）所望之族上下道俗男女拝見無子細之由兼有其聞之間奉伴清大外史并蔵氷等今日参之令拝見了其儀有開帳寺家之衆有講論之儀式共後南都衆有法楽之後大乗院殿有御

拝見御退出之後諸人群集頗狼藉之躰也栂尾
本堂ヨリ巽ニ東ニ傍テ有檜皮葺堂一宇南面也
春日御影西向ニ奉懸之繪像住吉御影彼是西
鋪也殊勝云云○二水記永正十八年二月八日
早旦詣木屋薬師堂嶋従去月開帳也聖徳太子
御作云云古物御面貌不埴八百年許無開帳云云

○

開白(カイバク)

炅異記下卅条受遺言造彼十一面観音像因開白

供養已訖今居能応寺之塔本也

○

戒保(カイホウ)

百代雑二僧都遍披戒保をおくりて侍るを返し
つかはすとて　前大僧正明尊
家のりせ吹るえみをとさつかかのいうさ海にかかうこきもつくへき

○

続後拾雑中

かへて　鑒　カニカミテ之

三二中 多の丸をやいのうらひの錦をこそ神ハかうてうけそうらん

○

ひき板 垣板也

枕冊子 九ノ卅 人の足につきくしきとの うき板

かけはん 懸盤

源若菜 院の御前に浅香のうけはん○枕冊子 人の家に

とのつきしきうけはん○源若菜下 ちかしきうけはん 九

つきて○枕冊子 廿段 博士陸師等の錦ぬ ほとに

うけはんとましてわかゝハおほんこの海のまゝへし

かしそ本

八雲

拾遺雑賀 中納言敦忠卿家佐ふ侍る時にしのひて 右近

いとちきりて侍ける事のしたきうらん 侍る事え

○わかき立たのはしらハかしはるのをやしたにん廿たつけり

○枕冊子 三八才 かしはきいとをかしきこのころの神の御まへに

んせいとかしこきしものゝみはけるいはをといふんもを

かし○赤漆集一 廿五

拾遺恋四
あふことのかたひしまるみちのくのこ崎ふしくのこ相馬まれ
○かけるか長歌 かさしの古郷や古志ていかゝせん
新六
おくの浦さの野守のるのかさなつけ菊は生六又あり 君也
又本

かるさと
袖中 十二 十三 をかりの宿の花をかるこそ見ゆにかなり
○志の前松上 恭 君ハ日に見てかりしもかけて
かるさとうち詠てこの○多まふ ○蜻蛉日記 十七
かる人かるさと能を見おほとに ○源氏落葉 かる寺他

あハせをかりくしらそ 明石巻 君ヲ云

かるかこ
今物語 東山のうるまみあたりに人まうけこぬある
らやふ○

かる鳴
保憲女集
きりかくかる鳴かるまこハ日かきぬしてこそちあへせあをとらへ
○

かたなし

続詞花 大内のかたなきのやうきをみて 淋賢法師のいへりけるをつけ侍る 心覚法師

大うちはかたなしにこそなりにけれ出てまいてあらしれ

新六 ことしき 光俊

立とりて光をこそせしうかれしの板の下をそ見をみられ

同 かしり 信実

世にたえぬ大内山のかたなしにうきかしらの指をそへる

○拾葉和哥集引内裡指南云 結政所陽明門内近衛北○公事根源外記史かたなしにて事を勘ふ○続後拾雑中○万代雑二 外記庁結政座

丹 古言のむしろ一なくに狭すをかけてとの浅みこてらさる 中原師光

ふしみの板のうへしらしらあかるかしたに板床のうちかうつく

○江次第十八 官結政結請印ナトト云コアリ弁官少納言ナト寄テ官符申文ナト詔書取傳ヘ内覧ナト催ス処也○

かくれも オホリハイマタ成長セサルヲ云

業平 うらやくなかにはかれしみうそゆれうしもいふにかわう

多くれにあらぬ不らいまし浦にとのそ○

かくもし

拾遺雑哭
あとをれきりつきさ山のかみをいるかをしをしうをしかし　よみ人しらん

かさむく　方引
草花歌合
うきをしきいとろやのこかい棒ちきみすうるむくちちらをけり

○枕草子
ちしをれさとの　日も女もりちのき人をうさらき
やふんの云云　○唐ちほへ上　世を　之へいいちもくかくむく
とらうむるふ

十六夜日記
いのるきとうか　ふふちをれるこうきこうこむくしともれの海にく

○

かはく　せそ

千載三　院御製
なつ川せきちきりてえつるちくしめいかはくりふの暮をゆうそ

拾遺哭　としのふ
君なくんやかるろ川をせ々をてしむうつくりふそ　七日ゆりいる

大和　同
雑恋三　よしくちしれ
おもひそきをもとをれれうりせむうはくことのい　思ひさし海し

同返し　よしふ
いかれまとも川くあさおもふんゆきてもゆくそてきいうれしき

新続古今一　同

○

かはきめ 溜女
和名抄 溜女
万代雑三 人丸
あされはかちわたる人うはきとめかなのとかしにあるはなし
〇家集可考

かはを木
古老口實傳云一玉垣柱瑞垣板諸殿堅魚木 踏越
雷処々仁有憚者也能々可〇
存禁法者也諸尊形躰表也

かどちの 門近

源 花散里 かとちかゝる所なれは〇

かと松 門松
拾遺賀上
門ことに千とせのまつをいはふらん松きる志川のほとりのなかく
山家集上
門ことに立る小松にかさられてやとゝやとにはるはきにけり
夫木
〇林葉六 正月三日人のもとに遣はしける中門の
松をとりいはひしにそへと侍しそ
拾玉四八ウ
春にあふる門松とふきさりてまても千代てんうちにかゝる

かくもこ

源 須ニ あしろき法ハてらこのおもく ○竹取 親たち

のかへりてはいさゝかの事に ○大和物語 常にゆかん ともかゝる

かくこゝる ○後撰雑ニ 法皇のかくてえおひたるを後ニ

ハ時かとらへてし○

かまへて 今も俗言にいふに相おなし

源 蓬 かまへて云のそゆかしけにとききこえゆきして

かまへん 構

末花 蓬山 さとにみたうこえのかの中にかまへんと 云々 ○天下

ヲ取ニ結構アリト

イミカハリナリ

かみしも 上下

古本今昔 ○宝物集

○布衣記 永仁三年ニ記ス 若黨中間ニ上下ヲ着召

具○縣居木首書云上下ハ即素襖ナリ○

かみのか 紙香

源 蓬 あるかしかうしの法の中に紙の香なと例の...

渡してあり

かみのと

思ひの海の日記 えいさとく人々物をつくして来くるか

まさらはうみのと見え侍りあり○

かんたち 後拾遺夏

神舘○神事おこなはる所也○賀茂の社の後に神舘の跡あり今もかんたちといへり 契説

千載雑上

かしうさ 久左云 かしうさはうへなきかしは用しるしる細工の為にふ うしの詞なり

宝物集

散木集 六 雨のふれば笠きんとしけれは馬のわろきまれはよまる さしうちむかを かしうさのあやしきにまるは十歩みさへわたらうれぬる

○中務内侍日記 御馬をとく さし[相]して 此御馬はうき わろきやしはへんと申せていしくさうしもうして衆人七

この身さしせよと いふゆへ 又此御馬ともめて多く 渡しせうふ

につ後は御かしうさはわろきやさうふしんとさうしや

ありしもと云 今モ馬ヲタメスニカラヤカヲ目ノマヘニヒラキテミスルコアルナリ

○枕草紙 人めかにつきくしうさの かしうさ ○同十 十ウ

かしうさをさしなしに 風のいたく吹て よき海に雲をふ

きかくれもさし。かくれふきてあめこゝる　○新撰六
記唐笠造花藤巻之上手也○東鑑卅六　卅一　甚雨
之間於唐笠下勤行之　今云長柄傘成へシ

かしらのみ
新六　なかへなてゝ
ならさ人事きけしてあつるとちくやりとのをてるからみ
標注　枕草　千載　物名　かしらのかるき　季種注○

かしらかた　かしらかみの争
現存六帖　ほくしも　為家　隆祐
うら山のをもひみなそるほうらしき風にかしらふほそのさやけき

○盛衰記　名席相撲条

かりしほ　蘇時
夫木八　清輔
かりしほのそともの森も枯ぬらし　ほともなくきえぬさみなきと

かりとの　假殿
中務内侍日記　春日社造営のかりとのをかり殿の御ほ
とみて○

かとのゝ　寛子

西宮記献鴨子 云々 河海抄きさらう

うつほあて宮を宰相のひりけてかりの子にかきつけてやりたり

うちのうちに今まゐるまうのこハ君か宿みをこそしられん

○遊泉日記 康保四年条 三月つもとりくにかりの

子のこゆるを 云々 ○枕冊子 うれしきもの あてなるもの かりの子 ○源

真木柱 かりの子北いとおほうまと侍らんして 云々

同 ましか宝てしまかなまあれなかりのこをい方にかいとりくれてき

同 橋姫 うちなくてつらくさらにしなきめかりのさめらみえ あそましらん

新六 あさる 光後 あしたねふうをねみなく かりの子（玉子）のかやみ侍さことゆハ首のほし

○万二 鳥塒立飼之雁の見 ○冠諦考 天飛ヤノ条

○古事 仁徳記 かりの子

かるめる 上下○甲乙

體源抄 かるめるといふ事の字太神景範家記ニ載之

上下と書てうち合せて人にしらせる事之可秘蔵之由

乙ともかけり○

かきいろ

野守鏡序 あらにたゝみける事をつるきのをいろに 此色ハコロイロトイフ色ニ同シク声ノツヤ也○

五言

かきあはせ　筆ノ調子ヲ合スル也

源　若女　ことあはせ琴とりてさしあはせて○

ふしさそ　新続

かくしさそ

万代神祇　慈円後

かくしさそかみのやしろも世中のふるきあととはなきにしもあらじ

○

かくれなと

隠言○たとへきえにも人しるへしけんちん

長明無名上　一日のあはれしるしをかくる言はし

ふる人のすゝりなをしを○

かけつくり　嵯峨

野守鏡序　山ふかくうけつくるうちへ○中務内侍日記

うけつくりなるにあるしきやりのはとちりなきをかく

○

かさまつり

拾玉一　早苗

小山田のさし徐の末へのなかくにうゑらるのきのかさまつり

○

かしはさき

山家下

うしほさすそこに海のうはゝ又いつはたをかへふきつくろに

○丈木 世 六 あまたに

かるあし

易田(カリアフシ)の今丘荒の名なるし

今義解

拾玉 堀河題早苗

さなへとるやまたのうちのかるあしはまたのかりをはさなへしかりけり

新六

かゝみせん 五元

続世継 あけくれ

この家人囲碁打ちも うきみせんみてそ

とく侍らん○

かるもかき 今云細結ら○堅結

新古今三 後撰

あしひきのさとのかるもかきやたくも うちにこゝろの

コレト丘 結ナリ

後拾遺

ともしひにてらすくさき あふことのかなしきそれるとものあらなむ

続後拾遺二 後鳥羽院

万代恋二　基俊
あふことはうらむともなけるなきもみかあらのあかとやうつき
飛鳥井集
ほさはあはきのはの露かあさゝのさかのまかれとゝむるをわする

かるかや　斤居行
拾遺恋一　兼盛
あふことはかたわれかけるみちのくのかげん月にもあらしとやなる

かはふね　河簀舟
曽丹集夏　長者家
川そふきそてしあることもなきくのあまそのせのきよしれりけり
夫木集雑　豊喜合　草松
川なかをそてつる宿のときもなき風もあかれきこときにうそあく

○兼澄集ニ地名アリ別也考合スヘシ

かはひしり
新六　つまこひ　衣笠
みさつのをとこにみけつかいひしりはふのゝあまをはらへけり
○丈木　衣　同　○丈木　以下欠祭　三句うしさろ
○カハヒシリハ破戒肉食ノ僧ヲイウカ盛衰記ニヒシリ柄ノカトイフヿミエタルヲ或人ノ説ニヒシリハ僧ヲイフカノ柄ニ皷皮ヲカケサルヲヒシリ柄ノカトイフ也僧ハ奠類ヲ用ヒサル心也トイヘリサウハカハヒシリトハワウニテ破戒肉食僧ヲイフカ○後

新勅撰三
なきはいかにくしてハハ大井川の堰の川はなりぬくしやまき
○馬内侍集可考○枕冊子 四十三段 草のいわりやあるく
とおもふらくしくゑへハ○源 下 若菜 さくろく古時の詞にも
哨石のあはれ若くとそきいまたならける○荘子 因是已
已而不知其然謂之道 林注云以下句已字粘
上句已字此是筆端遊戯作之處○

かるしけれし
散木集 聖衆倶会集
うけ住もきうしなき法のみちをかうしけれくもきさと捨てん
出家の序 西行法師
何事のおもき身にしてなさけをかうしけれさにあらざりてし

かけし車 懸車
尚歯会記 李經
いはふれりけし車を川つまにて せれおいてくちなんとぞやる

かさりおとぞ
言塵集序 万葉のかさりおとえらて 言葉も捨てず古き
の時代みちかさりなるあるの姿も捨てもてたへる
枕詞ヲ イヘリ

かさね詞
清輔集
なにはなるくといひしなほ葉のふしをへつれるこえもなかりける

紫式部集
心あてにあれかとしけれおけむせる佛のみ法そとハきえ給と

○詔詞解一 四十六オ 俗言オツレオ ホイ 物体ナイ○

かちとりめく

〳〵 紫花山 四十一 うちとりかたし侍りけんと○

かみのさうし

後拾遺集 山子内親王 の歌合し侍りけるにうたのさうし

にうき侍りける○

かみをつくる

海人藻芥云凡彼御代鳥羽院己前ハ男眉の毛をぬき額をたゝみ今をつくる事一切無之及末代毎度嬌飾の至之○

〳〵 かもゝの松 本草ニ尾松 草也トアリ

白氏文集驪山高翠花不来歳月久墻有衣兮瓦有松

林葉集一 故御柵 ふるさとのむかしの松もときはにてそとものやれきまゝにけり

今昔廿四 四十六 能因 さしふまゝハ瓦の松ハ生にける子日しつくき給への うへうる

吉野日記
かさしあハ松さへおひて雲井の花のいろも法にさくらむ
続古今四　寄松庭　俊成
みつかきのをのこえはまつ川の流の家くいって人をまつ哉
寄松庭ニテヨミ
リマヘルハイカヽ
玉葉雑三　山家　後京極
山深やのきはの峯の下　松て軒のつまの松風　そよふく
○

かゝしく駿ゝ敷
中務日記　かゝしくしくあるおほくみえんかとて○
菜花　寄月花
ゆく月のみかゝしくしき　清あつさ法之○同　のかく　のこう

かゝ宝清かし　報賓
宗円保　為家君　ちる月の神さひにかへり清かしのこそあらめ
まつんそ○源　玉ある　三条らも見あるへんにさうらんなん
星中ハつゝら清月らんと○

かちんの滝あし
袖中七十二　師時　亀益ト
むかしからの滝ちやあまた一つにまとめあなたまとめりゆきを姥しき
○

かりそめふし　苟且臥

千載四　房実

あしのやのかりそめふしは津の国のなかくへゆけと忘ざりけり

後撰恋四　藤原滋国

杉の岡のうきそめあしも忘てもりいはつらい袖を紅につゆし

六帖

七言

かりねうきかもしれ

保憲女集

春日にあのめもこえやうちむまそてうきうきかもし人のむくうむ

○

かゐくれまじき

庭のをしへつかくれもしき御ちとを

かたゆひの袖

思僕日記　うきぬきあるうき涙ひの袖に

かけとめしふる

長明無名上　いはひてをわしふる人をくれうし使し○

浜松四　つひみてをわしふる人いでさぬ気り○今昔

卅一　四　古ニモ不恥　今モ肩ヲ並ブル者无シ○

同 同廿四 其貽ニ座主肩ヲ並ル人无カリケルヲ

○

かみくあはせ

昔本雑上 大殿にてかみくあはせといふ事せさせ給ひけるに師のこともかれむとある

君か代を祈りいのに植たるらん立さかゆへき松に植そへて

○同 人のもとに植たりけるにかみくをおきてものへとらいそ侍りけるとある

これしさのあはのみやにとちめれはとおくかみをあふきいるらん

○

かはやなき

拾遺雑下 かはやなきとて

こむやあをき糸はみとりにあるものをいつまりあけのころもなるらん 仲文

宣徳兼宗下 猶法のえしにかはやなき柳をひて大家

名におちてあけの衣はこきぬれてみとりの糸をとまるかは柳

○同物語に かはやなき枝につけて かはやなき あかれとも見

里 かはやなき柳は 坊ノ国之

万一 けふのとこの糸カ志しあ川たりに中さい五位の冠

○李吟六一 說河柳 一說津国冠里にある柳名也

○宝月保萬葉考書一の考○

八言

かきあはせのかほり　雑薫物

庭のをしへかきあはせのかほりひかくいてう川くしくくん

つるをいはさせあはしあはせ○

かはとふ綱

増鏡　ちはり川

白ゝ絵のこ宿ちにゑきとのゑゝむして○

かはとふちとも

宇川保　藤原君　ちゝきみちゝにも絵つゝしうしきこゝと

○浜松物語一あきしみかしゝへり○愚管抄三ゐしと

あしたうなまへ多るみを結さん○今昔廿四条此加持ニ

現ハカシタル人々ヨリ世ノ人皆貴ヒケリ○

小右記云大夫名隆家訓読云伊部手佐加也加

寸○本居氏云俗ニキコユサヤカストイフヘ

キ也○ヒトツノ助辞ナルヘシモヤスヲモヤ

カスオヤスヨオヤカスチラスヲチラカス　猶

タタシ○　袖中一　九オ　まはらつき

山家下　七十一

山さとのくれゆくにはとふきれハ吹あらはしこせのわたりか

○新六　ふち　光俊　はなもつきせぬ

拾玉集
しきしまのみちのくなきあしはれ　けちやしのむかしにかへるわかひかりかな

○今昔廿七（廿九）若君ヲ遊ハカシ奉ツル程ニ○

同廿八（三）幕ヲ引マハカシタリ○宇川保（国譲上）

ものとしのはしのはれるにつひやらさてさそいはれかしせめとて○

源若葉　あてあらかしつるをきは、うらて侍るを○同　明石

かしこうしたをもてうしつるみやとんはなる○

かはのかきね

庭のなかしへ　清う蒔のかき根しつらに○

かんざしわろかり

源総角　うんさしわろかりしのひきさまなる人のかたちけにふ

とかほえて○弄　つらのさはかや○

九言

かしこうとにうるくは　丈夫ナランハトイフ意トキコユ

蓬花　うらくの子　うしろとにかるくおもしはきは一天の君に

さそおもし侍れめる　今モヒヨメキガカタマラス

トイフ同意顧頒経ヲモヒア

ハスヘシ○宇川保　花開大きうけはなき　大君見る人いとかほさ
多くの本

みてしほむもさくらかん コレモ丈夫ナルヲイヘリ

う花ともかしらかはきれたるはかはなくうこゆらめくくれ

ん

契沖名寄外集引岩神

岩神をまつるむらひかは世の中にかゝらかゝらくてさしつれ

〇清輔集にのし岩家可考〇

十言

かいしきつくての大刀

くもゐの花　秋庭三郎清長

十一言

かゝみかさりのつるきを

くもゐの花　本間左衛門太郎　茂景　〇増鏡　老浪

かしは羽みかく玉つさ

山家集上

かしは羽みかく玉川さのくちしてかはく渡る夕やこの宿

永中四年百首

竟宴家

かきまゐる本みつも花さく

千手陀羅尼経云此大神咒咒乾枯樹尚得生枝柯葉華何況有識衆生身有病患治之不差者必無是処

千釈教　前大納言晏忠

たのもしなちかひは雲にあらはれてうまれにし枯木も花そ咲ける

続詞花　覚延法師

雪ふれはちらぬ花のなし御形山かれたる木にも花咲にけり

山家集下

此春はえたしくことにさかゆへしかれたる木にも花咲めり

同下千手経三首

花までは身に似さるへしくちはてゝ枝もなき木の根をなからしそ

○著聞集六　菩提寺舞

よろつの仏のちかひよりも千手のちかひそたのもしきかれたる草木もたちまちに花さききみのるとときたまふ　云云

コレハ今様也○

語林類葉巻之六

清水濱臣輯

きの部　一言

き　季

源みつね　此月はきのはてなりとおもふらむあまる事をいふの

うつほ　河海三月春の季の終之四季説世俗説憚之云云　細本説なき事なれとも季の終をのかれんためと

土木六公朝　きけん面の松風木末に吹くと言ふ木の葉けて落にけり

季ニ木ヲヨセタリ

きぬのなまきと云ハ某公の事也

後撰恋三同恋六作者きんたゝの朝臣の女ハ陽き〇源氏
若菜の巻又紅葉賀ハ忠きう〇あふさかこえ〇竹川
ゐまき〇後撰秋下むしの叢香殿のおほき〇業
平ゝ左馬頭 才十三テ 元由き はゆき なにいき〇大和きん
ちゝくハなて本ハこえし云云 公貴之章をさしていへり 公貴と同義なり〇源
手習おもき〇類集野宮歌合たちもき〇業平朝臣
いぬき 上東門院のうへにしハ〇源氏 女その子のかむしてふ
河にきんちうところあり〇いはろは あなうき〇宇津保 春宮
うなゐの命さきといふをとゝめて〇同 きこえて 待ちぬしの

き

二条大貮集源大納言のむさくハ左大臣殿の陽ゆき
とそいふめり 左大臣殿の女房 マスキトイフ ドイヒカタラフヨシヲイフナリ〇大鏡
序きんちかけハあなそとあやめせられしかも〇宇津保
楼上下 仲忠の侍従童女ならぬきの同 きこえて 下つの兄
んなとなとときといひて〇同 蔵開 あるかたきんちうつされて
云云〇

二言

き川　杭

伊勢物語
くもあけはきし川にもあれんくもかけの濡さきに写てきれとやつる

○続世継　鳥羽の渋葉　かはちにありて太やきし川んて
あつし車つしれもはてやしなともまる○一万十六さしれ

へ水渕にあせてあともいちの津の（檜橋系本）きらみあむ（さい）せん○水鏡

きと　おのさしあるつたるをにいふなり

うらみ組きとむ組へさかるこそちまそると○竹取物語

くや姫きとかけ水形くね○古本今昔十三行土佐国

堀金語急（き）○同廿九条忽ニ急（キ）ト失ヌ○廿八

十八人ヲ遣テ急ト御座セト云ハセタレハ　忙デフ

御出アレカシトナリ　○鷲声也今ノキヤ　○隆信集きとをと

ろきされもさのころてあそこ　ツト　イフナリ　コレハコメノ
サメルニイヘリ　○宇治

拾遺三五　小式部内侍きとみてをるつるそらにしれれは

つてもかしらくる人あやしとおもしもる○吹竹取抄

きむ牙

和名牙　岐波○一万九牙（キカミ）喫

きふ急

堤中納言物語　虫めづる姫君　ちか劔いときふに

いきぬ負へハ○源　浮舟　とのいときふにとめしりけて○

きも

一

大和物語　小

こいしさの弱て○続世継　白川のこぞり

てそのうちんのをれするつくろさん○　紫檀のきれ劔にや

のこれに書をりける○　和泉式ア集　二七　今物語ふして

髪のきれ　[illegible]くさ、分ある　[illegible]にれて

林葉　三

さとしつの山依けにまかる小萩原のきなくのみこきあけり

三言

きうく　着習

京極　拾遺　きかへとらせてきかへて○　濱松　四　きかへの

清[illegible]しうと尼君に[illegible]せれしして○

きらさ　木草○　木草ハ家にハ草本綱にハ本草といひなまくり

王二集上

山風や枯のあらしのとまりれ本草も雪にしられまてら

うら川深きまで

彼[illegible]本草のなもうつされハ風のと[illegible]もあくらん

玉葉雑三　定家
のこれる松のふる木[illegible]

万代秋　信実
さびしさの[illegible]

玉葉十八　草木
[illegible]

拾玉七十七
枯はつる[illegible]

保憲女集
[illegible]

ぎしき　儀式
落窪四　廿二
[illegible]
[illegible]し

きづれ
四季談二月　[illegible]
うし○和名抄

貴殿（トデン）
小右記寛仁三年の所に人をさして貴殿といへる
有○今昔廿四十三　其ハ貴殿ト川人トコソ此罷
ヨハ眞ツラメ○八雲御抄云通俊卿の家にて
いはく貴殿ハ詩賦に長じたり○

きぬやし　絹屋

栄花　音楽　そのたいこんのとにきぬゝうちてちらのそう
のそまとりまうくれきて　○同　浅緑　涉道人きぬや川く
まてあかうしらぬもうこちせ　○　今昔廿一　五　舞臺結
屋ナトノ照り曜キ○

きぬも
源　女
○　宇津保　祭開　いときぬもみてきぬさきこう月しなし
てう年十七　○源　桐壺　いときぬもおほとハあけハとし

きりし　吃哩字
拾玉四十一　蓮花部　ちりうしし　きりしのめてあるきりしの蓮も紛ゆ開て
新六　秋月　光俊　みそみる秋のきりしのこえおきそ　相　九月　月ハきえみける
頼政集
丈木

○　哥林拾葉　ツハシ

きをり

新六家ニ しを わかし 光俊
ものにれまぬ家にあそひあり色く紫のさかりに人をはちやすらん

○松浦宮物語上巻 くものあそひいときさかりにおとく
しくて ○盛衰記三 七 田舎侍 気折

カリケルカ○

四言

きうきう 九列○九國
菊花 八 花山 つくし九國あつまりとあはせと

毬杖（キウテウ）

和名抄雜藝具毬杖
○大食調曲名打毬楽○宇津保 祭使 きさ
うてしをもちてあそひて、うちうちてハ遊ひあそふ○

きうつく 少入之
漂 廣雲 ともつのけれにきつきてきめくとらる
遊てわすれん○

きれし
和泉式部集
そのあとにひてまれの虫の絲にきれしにきそうらしまし

○

きゝみゝ

落書露顕序 世のきゝみゝをふさき侍りけり ○大鏡序

いときゝみゝにほりきこえちかきはとたちやきんとおふに侍

る

きくさい 奇怪

続世継 めり給 あやしの清りきさいれて海をにきく

いわりとそ御感せられける 白河院清語

きさの木

宇津保吹上中 きさの木にくろかねのあしつけ宣廿四

拾遺物名 いろおのいしをろそてうみにしむきさのきにさそ知らしさかりけり

○和名 抉樏 唐韻云 樏 音雲 漢語抄云 木佐式説

文尓蚶貝文相似故取名焉 今按取和名 木文也

者義相近矣 以此字為木名未詳

○李部王記 天暦四年七月七日是夕藤女御有

産養事 産婦饌衡重十六合 破子食七荷 乇食八

具碁手銭二万 贈物児衣襁各五重 納支佐木筥

二合 白絹包 使大蔵丞藤原宗忠 ○

拾遺物名　さむのきのたこ　たけこ
たとるもにふるなくあ内のきえせ給ハ句きさのさのふられてこそちら

○

きしゆん　吉志舞

北山抄大嘗會午日条云次安倍氏奏吉志舞五位以上引之設床子等如前作高麗乱声而進舞者廿人楽人廿人安倍吉志大国三宅日下部難波等氏供奉○寛平記云三四人着六位袍闕腋打懸甲冑執桙○兼平記云於舞臺西奏之引頭二人立臺下舞人在前後端者服甲冑在中間者幞頭冠末額褐衣裲襠皆執楯戟舞醜力云云○

宝物集

きしめく

きしろふ

保憲女集
あられハみえにきしろふかつらきをいつまりえハきえんとそみる

○源氏　○枕冊子　はし十七　きしめく

車にのりてあらそひの年にきりぬゆやあしんといひあそし○

吉書（キッショ）

隆信集哀傷　和泉式部のまうとにまつりて吉書奏しとて

○同しとのまそのち捨えつしゆきつきとしもおもせしを

しつとらけり又古書に○

きぬかつ　紫木のりし也捨之

源松　｜｜　きぬかけ川ニかけ○

きのはし　木頭　きのはし　木槵子○楉コツトツ柮小木ナリ○或云木頭○木端トモカクヘシ○切カブナリ　無ヨハナシテエヨウナキサマヲイフ○又用ハ[illegible]の名之

落くほ上十五　かくしを木のはしやといとふつされらて○

枕冊子四段　おもふ子を法師になしたらんこそいと

とくろしけれさるはいとたのもしきわさをたゝ木のはし

なとのやうにおもひたるこそいといとほしけれ○　つましく

草

○梵網経云若佛子信心出家受佛正戒中畧一切衆生眼不欲是杞戒之人畜生無異木頭無異○

きぬかう

続世継　苔の衣　法しもえのきぬをぬきにはなしたるみや

三条のあし草おとこ人ハなしたる○今昔十九十条極シク

窓ク除武クリ坐カリケル○源十七とつらぬ

人のうたにつきてきたるをくわらしのかなもあちきれく○

枕冊子 傍 廿一 花の中より実のなるの玉かとこそみえていみし
くきもやうにこそなまれと

きびしく

名の白縫上ぬか くしくきびしくのなくて ○凛 あらしき 琴
つゝましう ○字鏡 凋 ○凌 松四 きび
しく六ことりわれとしかくれ○

きとうき 清書

十六夜日記 百十首のうらをとてくなまゐらるとてきとしつき

きもしあくれ○

きりなえ

二条大皇大后宮大弐集 殿の御しうしおとてにきり
きてをしかかさて二三日 ありぬほとに ○東鑑十七 廿 御
所北壺構切立皆被用松○

きてもし 今云キレハシ

山家下卅四
そらの名月 ほくの端のきりもしハ猶りかゝる くもさえほま

きるとの　衣服

宗保　ごしゆけ　屏風几帳　きるとのゝかりハ○

切銭（きしぜに）

東鑑五十一弘長三年九月十日丁亥切銭事有
其沙汰近年多以出来之由有其聞自今以後者
用切銭事可停止之存此旨普可令下知之由被
仰充典厩等云々其状云
　切銭事　右近年多
出来有其聞於自今以後者用切銭事可停止之
存此旨普可令下知之状依仰執達如件　弘長
三年九月十日　武蔵守
　　　　　　　相模守
加賀前司殿○

今全ノキレヲ通用セサルゴトクイニシヘハ銭ノクラヰ高直ナリシ故ニトレノ有ヨハ通用ヨト、メシナルヘシ

きろく　きりくの略の

披衣ニきろくとれしまりても　さけ尼の　さはえ○

五言

消うくを　常ノ詞ノかへりハ殺ノ字也コレハ還ノ字也

新古今　摂政太政大臣
きえかへり岩まにまよふ水のあはのしはしやとかるうす氷かな

○
きしのひたひ　岸面
菜花　こゝろえく
岩のかきねに流れかゝる菜の花いつもみはらせてゆくへしるへき

○
きそくめく
菜花　御着裳　かのくるま人々きそくめくさうさうしき
ことをはゝかりあはれとのこゝろもをかしく○

きぬにて　纈
後撰恋上　少将内侍
人しれぬ心の内ハきえかへりてきえあきさへいそきなん

○
きぬかつき
雲井のみはし　きぬかつきのうちのこゝろのとも　コレハ平人ノ見物
女○同上　あやしき心まゐるきぬかつき○同　きぬかつ
世
きぬのすそにさそてをうへにうちきて○同　内裏の女房達
二十人あまりいろいろのきぬをかつきて　三こ○同　そのほう

さ海くのきぬくつき○

逆修（キヤクシユ）

万代釈教　ためしりて逆修しける人の導師に請うりてゝ　永縁　○散木雑上前斎宮の内侍比逆修しけるに　○東鑑卅七　四　武州有御病悩事頗危急之間及所療逆修等之儀

客殿（キヤクデン）

小右記参斎院於客殿　云云　○

きりうつる　今云キリカヘ

詞花雑下　為忠家初度の百首に　附　中略　遠くみ

きりうつて　○切下文ノ可　職原抄ニ見エタリ　○

六言

きりもろしう　さしてみて行きるいきさ

栄花　浦〻の別　四十五

北の翁　塞翁之○　塞ハ北方也塞ハ北の翁と云之

淮南二

土御門御百首
人なそきこのあさゆふにゆくとも待ちかへるちまたにもなし

○

きんのうるし　金漆

岩花　玉臺　清道のくさのいぬふせき　ハきんのうるしのや
うにぬりて○濱松四　色なきを髪うさいて色ぬ
ハつるきとりまき海て　つむくさ　色うちをちれく論に
き人のうすしれんとの中に彩る色なりしつやくそうて
○岩花　…花　花山院の　清らか傳ハきんのうるしれと

いやしにぬりせ多くて○宮乃深　花洞　きんのうるしのやう
にきそあき　コヽハ髪ノツヤノ　ホメタル所ナリ

きとのり家　乞兒の家とこゝえあり
今物語　九條　可考○

きりの海うき
曽丹
おほえもえやふしえの山も特まハいるめもこえれきりの海うきに
同
山さとにきり北海うきのへこえハ…人の袖もそ濡し
新古秋
同

○

七言

きさうくの神

万代神祇　蝉方神を　能因法師

天の使に出てをとめの姫にちとせいくよに御覧きさうくの神

夫木卅四

同

後拾遺

出羽の国に侍りてきさかたと云所にてよめる　能因

世の中はかくてもへけりきさかたのあまのとまやをわか宿にして

○

北の藤浪

新古神祇　榎本明神御歌

補陀落の南の岸に堂たてゝ今そさかえん北の藤なみ

同歌人　摂政太政大臣

春日山みやこのみなみしかそおもふ北の藤なみ春にあへとは

○

八言

きのしたのこの日

忠見集　春風の歌

青柳の糸よりてうちはへにけさしける

男きあひてせしそまに

柳の糸もちきりて来る世へ人をは御月にむかへてとこそいつくさん

○

おさ絵　十郎

中の絵　十郎

九言

きくとてうつろふる

曽丹集
秋にあるをとひもしらぬものゆゑり菊の露にもぬれさいなほつる

散木集秋　九月九日菊してくはおせてことし人のたちまちとある
ちりさい初て志わめるかほりされきいなつときくの志もしあめや

○保憲女集四季詞　をさりに折りみなかきも　そてきくに
うきおほむてあきうほかしなめる　こおきれをんみゆ志を
のかきと　云云

楫実集　九日叙菊
おいせしとおもてしくみのこえとも露おりあくれる志く菊のをれ

新初哭　九月九日従一位倫子菊のさこをゝ多まひて后のおひをてとと清年六以系式部ゝる菊
菊の露まゝをもかりに袖ぬれて花のあるしにみせはかへん　以同

紫日記

保憲女集
あきをとて菊の花のさくをききにしらさらさりけり

○

きもおろさうえて

ゆう保　花闌　その音声楽をきく人はききもさらさうえ
てや波ひ宿ものはなく行く向あるものは君かくれりしを

○盛衰記　四十二　此扇誰カ射ヨト仰ラレシニト肝
膾ヲ作リ難ヲ噬ヲ飲ル者モアリ○今昔廿八　二卅
此レヲ見テ肝ヲツブシテ奇異ト思フ○同　卅

一十 色形ヲ失ヒ肝心モ迷ヒテ○同 同 卅二
肝モ違心モ迷フ許思ヲケレハ○同 廿六 十八
肝落居ケル○西要抄云 さる迷ハいさゝかも行迷て
かゝみしくらむへかれ アマリアン ニ迷スヲ云 ○増鏡 けふの雲わけ
これ人きもをつふしさわくとふほとさへある○
きもをまとはかるさる
赤染集三
きもきもをくるゝはとれそ思ひつきをまとはさるさるも恨え
○淮南子 椶枕顛蹶而失木枝○

くの部
一言
ぐ 具
栄花 月宴 六 一所ハ宮たちの具めしわたれ○挟衣 二上 十
うれしめきそ大殿の御くるまも常 八重 ○偶良○ 供奉
○竹取 具しておそれし給○源 かけろふ まかん宮の御
くまていとおとれかね侍ほとの人いまも 一品の宮と言の天とをいへ
ともにめし○栄花 もり花 一てことゝ四の君 云云 わめ君
具ニ
の御具に似しきあえるひにしきつも 鮮ニミタマフ○同 ニヤ春ヘミ
同
枕のくし白う紙のかしうらを入てつゝみの君をしかん給き

なかへさ男とおほしてしなり○堀川集ふしなる
人のめぐまるゝに伏す○大和物語 百四十七 此在次
君の乳と不なりて亡くなりける人○源 篝木 そのゆきも
男しておほせけれん

清輔集
あはれなりしきさ瀬をつにりに男せんや田面川此方のまれいむ

○

二言

くぎ 釘

金葉連歌 ここ人なきに
花なきはちるて峯そ見つけれる

てまりーー
ミてんなーー
あ川ふミーー
へつふじーー
こよみきーー
めさましーー
なむけーー
わとしくーー
つふやきーー
あゆさーー
なきとけーー
かしつきーー
んきちーー
もろしーー

大政大臣家にて 風の前にくうてはちけり○定頼 式

十三 其なき

菜花 月宴 廿一 そしておきて○同 同廿 十四 そてうなるなき○桜

衣一 上廿 八 あつくなるさ○四季読 二月 人のなさいより

へ川ふなきみ○同 十一月 あさゆめりなるこころなきさけ

ふあるさ川つく○万十二 廿四 めきはしらさ○同一 廿八

なむけるき○源 紅葉賀 わりしめなき○四季読 九月

つややきなき○源 梅枝 廿 なけきなさ

後撰雑
めかんとなきちとあちめん なをさなさをいはれしきのさやなれん

かくむ——
こんま——
もとほ——

○六帖詠草 なでしけなき ○源 若紫 またいとさなき
かくなるかしつきくさとおほいなり 紫上ヲホナケレ
ヌムスノトモイヒカタシ ○盛衰記卅六 ハ北方トモナリ
サレハ様カハレリトイフ
一モ世ニアルナモアラハカコチリナニモシ
候ヘ○今昔廿八ノ卅 聞継テ世ノ中ノ咲種ニシ
○万十七 長歌 ところづらの可多良比具佐といひつくべき
人なもつりん
後撰恋五 ところ人そまれ
思ひとこまをとこのあしきもののはなはまたきこえて人はかりし
○源 藤裏葉 いろまさるかしのすきたさへてこれをさへて云子
○増鏡 序 人のまてあはりつむきにいはする ○同 藤衣

清みなきくさのこえをきりもふ ○源 須磨 うつはあさひの
ことはしらなん ○同 ことをつくしきりしきにうつり
きくさにおそともはしらく○
ちくさ
ふし 閭○閭ノ千下 堂集
山家下 四十 庚申の夜よしみさりて前をよみけるに○二条
大皇大后宮大貮集 新院にてかうしんの夜よしの序
めくみにて草の夜の恋をそりて ○同 上にて庚申の夜人々よ とあるつき
そにくしのおほへ紀黄慶おくのうそひもつけれんなら後
ねと○増鏡 三神○ やうそし継事もしあて前のなの社

みもくどをそそりける

くせ 癖
林葉三
めもあやにさやけき月のひかりもさそひもよほしてみるかちなる ○

くそ おそのかみて名のたにつけあるハくそをかしらやまひて云也
くつ深 藤原君 ありしことのはふかくそちられの
同 同 そのことハさやかくそなちのしるんをハ○ 大和
物語 かやくしくそを いひける人○同 小やくそのこも

ありの貫之童名あこくそ

屎糞 人ヲ罵テ云

華王經云尓時會中有一居士名曰選擇居士有
妻其名妙色面貌端嚴姿容挺持選擇居士深生
愛着煩惱熾盛聞佛所說即白佛言世尊莫作是
說貪欲之心起於屎尿所以者何我妻端嚴無諸
臭穢佛知居士貪垢情深即取化作一婦人像端
嚴淨潔秋如妙色整容徐步來入衆中居士見已
即作是念我妻何緣來入此會作是念已即問之

曰汝以何故而來此耶答言欲世尊說法居士畢
坐自衣上佛以神力令是婦人糞汁其衣使此居
士不堪臭處以手掩鼻顧視左右誰為此者跋
難陀在右辺坐語居士言何故掩鼻而顧我答言
是處甚大臭穢以佛神力令跋難陀及諸衆會見
此婦人使棄糞穢汙居士衣跋難陀語居士言
耳觀汝妻所為臭穢居士答言我無所疑我妻淨
潔身無諸穢若有疑者自當觀之語跋難陀我意
汝為此穢汙跋難陀即大恚怒從坐而起語居
士言汝無慚愧誰名字汝為居士耶汝今應名屎

居士也云云○今昔廿 三条 大ニナル屎鵄ノ翼折タルニ成テ木ノ上ヨリ上ニ落テフタメク 天拘 ナリ○

くと

和名窓(リト)○竹取 上にくどをあけて○

くそ

クコ相通 クハも是也クハヤ クヤツ同意

落くほ一上 十一 くそじさま文をみて由川りてゆく○源 篝火

人のあやしとえひ侍らんをうるさへはくそやうて出かけに

くちや

○校衣四 中十 四オ くもやいをしれみくみそとて ○今昔
廿七 三 四十 女コレハクハトテ取スセ サアト云 ソラ井ノ
コ

後撰恋四 忠房朝臣
わきもこのかくふるさとをせ流れてくもこきまれて流をちらせちや
桑ニイ、
カケタリ ○

くみ 組

字鏡

嘗今にわらけのくみをして○

○新古雑下 後冷泉院御時大

たひら
あふみ
ふくら

十二
某鞍

和名抄鞍馬具 鞍 説文云鞍音安字或作鞌 和名久良俗有
唐鞍移鞍馬鞍也○万五 九丁 阿迦胡麻尓志都久
結鞍等名
良宇知意伎 久老云シツクラハ下鞍ニテアラ
ツミタル スシツイ 古ノ綾ニテツモテツ
鞍ナリ ○和名鞍橋 クラボネ ○同鞴 シタクラ ○同鞍褥 久良之岐 俗云
字波 之岐 ○物具装束抄 切付 鞍 号下小 公卿位用之 及四
○宇つ保吹上 上 くろう松の馬にだんのくらおきて
白銀のをけふに(?)わらせ をう○同 同 あてまことの(?)くら(?)ほ松へ
うのうものたちくら ○同 あて文 上達部ハあくさきくら馬
車にのてうくらもうなくらにのりて行○愚管抄五

射かくし矢の鞍のしつ(後)わの上より腰にたちまとひけるを
為忠後百
かくらや山ほとゝきすかしぬ家前の庭もせに咲うのはなかな 仲正
○今昔廿八 卅五 女牛ニ結鞍ト云物ヲ置テ ○台
記臣下大饗仁平二音也於西門外騎馬 馬鞍云 余
倭鞍有泥障具舎人居飼置移欲置倭鞍欲旧記
無所見為尋近例皆倭鞍 云 云 今従之 縣居雑
槁云カリアレハ倭クラニハ泥障アリ移鞍ニ
ハ泥障ナキヿ知ヘシ又右ニヨルニウツシハ
唐鞍ノウツシナリケリ下ノ雑ノ部ニ続古事
談ノアカリ馬ノ次ニ移馬トイフ傍注ニ移鞍

ハ唐鞍器物施黒漆者也トイヘルヲ合セテ見
ルヘシ ○拾遺別 実方朝臣 ことのくまへくまなく待り
けるにえらくつゝきけるとて 右衛門督公任
あつまちの木の下くらくなりゆかは都の月をひさらめやは
○清正集 きよ人のくらのうちしきに○

三言
くらう川 傀儡
隆信集下 くらう川みくらゐる恋
さよふけにうつろふかろもうつ山影ミぬ人をまちまちのかい
六百番歌合寄一一恋

○長明無名抄上　みたらしのら川とも申なりてらくつう
うちつとけりに○今昔廿八 廿七 傀儡子ノ者共多ク
館ニ来テ守ノ前ニ並ビ居テ哥ヲ詠ヒ笛ヲ吹
キ
続詞雑下 傀儡にうたひて 能因
いつはりもさすがにあらぬあいは之ける人のこゝろをまよはすに

ら川 竹器
万三 廿三 角麻呂
たわられのら川のあまめのくらつきてたゝ海もかくらんいさむきてみん
○袖中二 廿二 世にら川めとすいさりの篭の月のつは
里多みるをえらう○うつ保 印さうの流中 吉吹上 中納言はきぬあや

ら川め
いとのくち

をいとのら川みいまて○枕冊子 うらとてるわ ら川の
あとり 篭ノ中ノ 小鳥カ ○

らる 丈本七 戸ヨーーー世
かきさせる 信実 卯の花垣をうかきえてくりいるても甚ハ来にけり
○

らき 文二 草木トイヘル例
うつほ うてうけ 草木のきうさ ら川の草木そらをみる
にも 草木のいろうちし○同 きうちて 草木うつりの松○

菜花 蓬生へ は殿くさ木よりうちおほさうまて〇同

同 あやしきくさ木をほうらむ〇澪標四 ら北はなかり

の菜木とかつ茂りんと詠へしても〇源 夕顔

ちうき菜木なといとに見知れり〇

和名

〇源 若菜上 くれしれと中のさ海していとさかりをとへり

やれと 左右君ヲイヘリ 〇源 寄生 くさしれとのつみても みき

のらちはさらぬ海しくや〇菜花 さくへの 殿は海はくさ

しにうせさせまつへき之〇同 同 くさしにうれたかりみては

いきてうさあるへきにあれ〇源 宿木 くさしれとのつ

みてもこそのらちみはさらす帰海しくやは〇

くちなし 梔 櫨

林葉三 為とう行はさるのあしはくちなしおもく秋てさもせくさの葉むし

同三 くちなしおもをせくの長橋をはさる月はあしはもさえるさうなり

〇

うつち 大秦牛祭祭文 傳教大師作 癲狂ヲクツチト訓ス

かちくほ二　六　かきくれのごとくにはあまりにふさひなくなるき
ところふほて語いてくつらなり ○ 砂石集三上
或里ニ癲狂ノ病アル男有ケリ此病ハ火ノ辺
水ノ辺人ノ多カル中ニメ発ル心うき病也俗
ハタツチト云ヘリ

くつむ　クスムトイフ詞ノ轉カスクヅホルヽ意カ
志の記上そこらさひ船にはしのいうちかうくりにくづして
し ○

くどく　功徳
竹取　いき船くとくをかきれつくりけるにやりて ○

くとく　口説
堀後百寺　後れ
ちしめ船き羅のつなりのかきさをぬかの袖しくくときつつる事
○榊葉日記　さはしくくときゝ侍りしかと　クドシクク説キカスルニ
イヘリ今云ノ口説トイフハコトナリ ○ 讃岐日記上　らいき律師
まれもち來て経よみ佛くどき來りせりけるをに ○
同上　おいしとくどき多て泣かうかきれ ○ 志の記下
海川来て見る人と樣々にくどきて ○ 讃岐日記佛

をうみくらきなさるさ波いと多のましし○

くぼて

和名抄　○延喜式

○宇つ保 国讓上 大きなるくぼてを白き糸して出で

て

同同 秋きるゝ水きる流れかしてき浅には非のおほうくるてとけらそ

○二条大皇大后宮大貳集 賀茂にまうりけるに雪のいとしくふるにくぼて○同　同　くぼてのふるさ

みなる波母のまみて○

くみて　組入ニテ天井ヲイフ

栄花 浦々別 ぬりたる花をあげてくまのうみれとも見ゆ　○堤中納言 うひ合 いうにそとのくさいまのえなり

ふともの おちあしは浅えの佛の侍らくとまそはおもため

上文み ぬりたる 先のをあり　○今昔廿七 世一 天井ノ組入ノ上ニ

物ノコソメリヲ見上タレハ組入ノ子毎ニ顔

有リ其顔毎ニカハレリ○大鏡一 三条 さて佛

の面より東のまきしにくまゝはせらまし色多之

為忠百首 同上 霰　仲正

くそて　組様

伊物

全玄上　さのみ

あらかりし風の後より絶ぬるはくそてにたかく糸やや有らん

二条大戴集

さうにのくそてみさむそこそ流れもかくうきなえんねてやはみし

○

十二

菓　くこり

新古春二　式子内親王

今更にさきぬとみえて流くこり春にうれぬる世のなきしぞ

丈木二　保季

行よや晴くなほくさる薄みとり波たちうれむとの明石の

薄ーーー

集ーーー

くやう　食物之供養の轉義ゝ

う川保　きこそ

いぬる七月なり十郎み法りありにく

同　同

ましらで今日三日まりそへみそのもえなきて　云云　○

くさきとうつの社をうゆきみて○

くやり

守つ保　菱系君

くやり川今は又たちうけと○

くらけ　海月

烟くらへ
袖---

続千誹諧 弁乳母
山のはをいつるのさへそさやけくも海わたる月のくらけなるかな

袋草子 増賀上人
みつはさす八十あまりの老の浪くらけの骨にあひにけるかな

元真集
世にへてはくらけの骨はみえしかと細代のほねはうくこもなし

夫木廿七 仲正
己か恋ハ海の月をそ待ち渡るくらけの骨にあふ夜ありやと

○枕冊子 五十 隆 さらにまた見ぬ骨のさまなり 中略 さて
扇のにはあらてくらけのなゝり 云々 ○

十三
菓くらへ
拾遺貞外下廿一 烟くらへ

験---
芝---
人---
歌---
命---
色---
ふさ---
ふな---
---うた
みち---
ちから---
むさ免---
術---
齢---
袖---
露---

拾玉三 山科
長からぬ花も世渡る習かしその山しなのさそくらへ待て

○金葉雑上 年へて久しく修行しありきて熊野にてりんくら
へしけるに

新六 しも
弱きよはりかぬる老の浪まくらへ永き日くらしもやらくさめ

後拾雑二 相模
さしもなきくらへ見けさらにもやらしそえし　浦のあしへ

仲文集
あらはしけりほくらへ世をそ極楽のおとてわたしいまのさてせん

安法々師集
松もまたいつもたけのむさふ待ていのちくらへにまたぬ君かな

伊勢集
春にきて恋もまにはる宿れまていろくらへき花さいはもなし

○狭衣一 五五 十二 くらへ○六帖 やと ○太平記十四

箱根竹下合戦条 うちしに目くらへして鎌倉にあり

ありおてはけありし○源 夕貞 あひれうりけるふくへ
こもりれとまいしうへきつるくも然うりき
きみなさふきくへ五つの個のほりえこにやしあやいあぬ
こゝのそまうりきて忘れ君うなあ名ふんのふうきくてに
○家集○六帖 海 ○続後撰底一 ○和名抄 雑藝
部 競渡 布奈久良信 ○同 競馬 久良宇麻 閃 ○同 牽道 美知久良
閃 ○古事記 力競 チカラクラベ ○字鏡 捔 知加良久良辺 ○同 扗 知加良久
良辺
夫木廿六 賀 源仲正
つらめのいのちくらべのうちはけを君まそ君がくらべ川仲をへて
○弁乳母集 あるへくらべみて高もせでかくてはけぬ

へしとあまえて 正月晦日
常の友ありける 露むくり君のこふ日まで侍まそうはあま
○宇治拾遺五 初段 ちまも乞はむうし山科のたつ
に四の宮川原といふ所みて袖くらべといふ商人あつはまる
所をと云々 ○宇つ保 菊の宴 ともかき娘 れおほく
ものせらるんうけあにして娘くらべれてせさまくらや○
古本今昔六 二条 御殿ノ南ノ庭ニシテ術クラ
ヘ可有ヨシヲノタマフ○宇つ保 藤開 行事にう
ハくまくらべはつりほみや○盛衰記廿九 上略 四宮
河原ヲ通ルニハ 中略 東路ヤ袖クラヘ 下略 ○

むしろちりの車
こしも云車

江次第四 定受領功課事 註件木勘文勘並前任功過諸
之多計久良戸○源 明石 ならへ
支木ハ 前民為々雅有 うつほ物語にゐをあもりて家々へ帰り出の花と
五十 天川やなのうちりの定まてちろそへハミきさ流れくに
○

棊車 十二

棠花 浦々別 十一 むしろちりの車にのりたふ○同 七ウ ちりへの 定子
の御きこうるとの院○愚管抄六 大うとのの人ハ閑院の
一家の中に春宮大夫 公実の嫡子にまでましも云北

車のつまへたりけり○今昔廿七ノ二 亦ノ日筵張
ノ車ニ下簾懸テ侍ニ人討具シテ御ス○同廿
八ノ二 車酔タル心地共ナレハ極テ心地悪ク成
テ目轉テ万ノ物逆様ニ見エ○同 同同 未タ車
ニ一度モ不乗サリケル者共ニテ此ク悪ニテ
酔死タリケル○今昔廿九 三 六角ヨリハ北口
ヨリハ口ニ 畧 其辺ニハ車備ト云テ者数有リ
○

くぎぬき

栄花　浦々別　うの山ちかみて八おりさせ給ひてくるしく

とらけいらせ給ふに木の通らいて多かる丹色ある人みて

卒都婆　くぎぬきいとおかしき中に〇枝衣　門れ

ともれて多くくぎぬきとよふ物をそしたりける

堀百首関　隆源法師
ともし人の通さぬ例に河口の関のくぎぬきちやたちにけり

〇撰集抄　〇平家物語

くぎだち
一方
さのくぎだち

文木　大嘗会　源仲正
菜吊やさのくぎだちさかれみて様かし人をまちためちや

くぎり　句配

言塵集序　此文字くぎりきりとて〇

くゝもり

枕冊子　ありくきゝみそてきこてくゝもりもいとらうたし

〇

くさがれ　草枯

詞花冬　曽丹
草かれの冬まてみよと露霜のおきて残せる白菊の花

くさたち　草立
○
夫木二　信実
春かきて又くさたちに成かゝりみしハふる秋の萩のやけ原

くさとる　草収
万葉
堀後百
続古冬　正三位知家
入日さし冬かれの野のたちくいまて草とる雪北も切くまれ

新六　おほたかうり
みかり野に草とるのたちえりたつゝききの羽音かなしも

○顕昭散木集注○

くさはひ
源　花散里　○同　梅枝　○帚木　○落窪
○源　玉かつら　○同　同

くさぶし
草臥○李吟抄一説鹿のすむ野への草のさはかり
又一説草に鹿のふしたるを云○山ニフスヲ山フシトイ、野ニフスヲ野フシトイ、萩ノ下フシモ、キノシタニヌルセサレハ鹿ヲイフ方マサルベシ又ハ野フシ山フシノサマヲ思ヒヤレルカ

万十 さをしかの草ふしいちしるく見ゆるさるに人のしらく

後拾秋上 家経
志かのねを秋きめの床に聞けるをの草ふし家やおくらん

拾遺負外下
拾玉一
山さとの外なる小田のかりいほはなかれく床の庭のくさふし

千秋下 寂蓮
野分せしあしたの草ふしあまたてるやはにふしきさを床の段

同 長覚法師
いろもかり露けうらしんさを床のつゆはらひぬる人の草ふし

続後拾秋上 公雄
枯むらむ小萩の草ふしふみこえて鹿の床に床を鳴らる

○

くたびれ 草臥 ○クタハ朽 ヒレハうつれのヒレにてあらむ と同語か

中務内侍日記 あらむくたびれ侍りとや中 云云 あらむハ樂之 ○同 十三日ハ清くたびれみやまれん ○太平記 五大塔

安然野落 宮らしも草臥くるしき清みしきもれく

くちをんな
おいくち
くちいぬ
かたくなやりこ
くされめ
くちも

くちあは 腐屋

源 巻浮橋 あにうつの冊れるくちあはの侍る ○小馬命婦集 婉河院のさらし物くちをんなの ○水鏡下 光仁 后ノ井上 帝光仁のおどし物をへいうりておもしておいくち ハおのきこうおいほきなるをハ忘れてして 云云 ○天武紀上 五 禍信郎嚥旋執得曰腐狗(クチイヌ)癡奴(カタクナヤツコ) ○宇治拾

遺七 かれうるぬ事さへあまたのものおほえぬくさり女に
うかしらいひ出しけり云云 コレハ薄情ナル女ヲ罵テイヘリ ○元真
集 くち藻

くちいれ 後俗の口入同義
源 梅枝 おとゝのくちいれのかひしに ○栄花 ちり花 あと
まとゝ口いれ多く侍しかいかきゝなくかし侍し○
源 角総 くちいれかれなも口入させ給○

くちふて 口筆
栄花 ちり花 七十一 村上の先帝は遠し侍んおきてさいの
せいみかとの侍んなりもなくもさせたへかりけも こゝろ
侍くちふてしておほせなまでつくもこなか我のとも
侍らんしてはおほしせさせたへるを○

くちろん 口論
ニ条 くちろん心をなしたい事なるにう○

くみかき 組垣
栄花 日かけのかつら
おはしやのあきちらいとさらえぬるやへのくみかきつくるさ祐て

○

くやく　悔々

後撰恋一　元良親王
くやくやと待夕くれと今はとてかへるあしたといつれまされる

悔々に来やくやとうけたり説して
くやしくとも云ふ旧説なり○

くゆる

野守鏡序　むらにうみつる物をつらぬきもちしうまい
こみてくゆほりなるほとと○

くゝへや　尊子

茱萸　三ウ　うやく反つほ　○　讃岐日記　くゝへやをあつめたるて

○同　くゝへやのうへをたちまちも○

くるく　俗グレくト云クルリくノ約カ

小嶋口号　小舟のくるくとほろつきめるにのりたるさま
ち○

くるやめ　厨女

宇津保　祭使　さらしきくるやめいふをもきうけ○同
同

くらやめくらきはつをむ　とけみさいやけのあらしてとて
きたり○枕册子 廿八段 くらやめのいときなく御らうさ
しいでてあはにうしろの人やさうなきれといふあらをかし○

くるはや
栄花 衣珠 小北のうへの清くるはやに女房たちのくるは
れときこきつけたり○

くまし
万葉五 つねしらぬ道の長てをくましといかにかゆかんかて無しに

○栄花 浦々別 うれしちうみていおりさせかひてくま
くと見けいうせかふに○斉明紀 千之盧(ウシロモリレニ)毋俱側
闇キ意ニテ〃ホ
ツカナキサマ也○

くまやと
栄花 月宴四十七 うやいあちまにいみしとおほし免しれうく
まやとみてさくさせかふみも○

くろうい 黒柿 音使
宇津保 吹上 中 きゐんきちくろうえうきとれといふ

きともをさいもくみして○同　同　くろういのつくゑ

くていし　懐紙

東鑑廿二丁　建暦二年正月廿六日云々進懐紙

○同卅四仁治二年八月十五日有当坐和哥御

會女房被進懐紙云々○同五十弘長三年八月

六日為被廻減罪之謀以彼懐紙裡可被書寫經

典○つくを問答序ふる　くていしのうちみかきつけ侍る

之○袋艸子　懐紙書法○

くさをあらそふ

五言

くさあはせ

和名雜藝類云鬪草荊楚歳時記云五月五日有

鬪百草之戯　ーー久佐阿波世 此間云　○うつ川拾集　くさあはせ

ほる所　さくら　○野守鏡序いはるゝいとけなくしてくさ

をあらそふちらとてあらそひしなり○

くさのいと

文集　草縷葺々雨剪剪

後撰秋上　菱原弁文

草の糸にぬくしらとうえつらは秋の緒へる秀ほそなりける

同 秋中 貫之
秋の野の草はいとも見えなくにおく白露を玉とぬくらん

現六 ちくさの 正三位知家
うかりける草のいともちをさをあつくはとはにもしられしの夜かな

続撰 雅世
春をへて世々へに人をかくす浦のつゆも草の糸かとそみる

くさのはら

源氏花宴
うき身世にやかて消なは尋ねても草の原をはとはしとや思ふ

拾衣 二上 きぬ衣
わすらるへき草の原さへかれはてゝ誰にとへとか道芝の露

新古 秋上 摂政太政大臣
行すゑは空もひとつのむさしのに草の原より出る月かけ

月清集
長月のありあけの野へはうら枯て草の原より吹嵐かな

拾遺 員外 下
たにしらぬおもかけの月影は霞つゝ草のはらをは誰かとはまし

新後冬 前大納言為家
いつとてもかはる人めの山さとは草のはらのみ冬をまちぬる

壬二 中
草の原秋も霜ゆふみて葉分の月にぬるゝ袖かな

うつほ 蔵開
世の人の心をみるに草のはらをもとひもこそすれ

隆信集 下

くさむすふ

方七
あさゆふのこゝろをやそあつかはしくみゆる草むら結て 草結葉

草をむすふは旅行の床の標也

○

くせくし

くちすさむ

栄花（月宴 四）くせしうれしくて○同（十二）くせし
しそおほしおきて多かりける○同（花山 五）○盛衰記十
六実ニ希物癖物（クセモノ）也（鶏之）○大鏡三 清んさ波のて
つるもしくくせしくしきおほえ侍りて○

くちあそび　口遊

宇津保（春日詣）ちりほしけの清きをめて祢をみもくち
あそびにもして契ふふ○東鑑（五十二）文永三年六
月一日（云云）阿闍梨兼日申状符合之由及口遊（クチスサミ）
云云○愚管抄七児女子の口遊とて十五まてをかし

きよにナハ○

くち木かた

枕冊子

○栄花（若枝）清ル帳ニハくち木かたのいとしくあざやう
にめでたきも○今昔廿四（廿一）朽木形ノル帳ノ清
気ナル三間計ニ副テ立タリ○同廿一（五冬）、
朽木形ノル帳ノ帷ヲ掛ケ○淡雲三朽木かたの
ル帳のうこきかた年へたるを○

くちをきく

栄花 さうへの 舟のかくきくにおもろさむくおもしろうおぼえて くちもきゝ給はえうきも つゝけ

くちをしれ

栄花 後悔大将 左近のめのとをくし侍くちをせにおち

いふ川 ○ 玉 そのくちなしはそのをいかりさしきあつかひ

いふことなり之 ○ 台記 久寿二年八月廿七日條云

先帝崩後又寄ニ亜スルニ云々○

くびなまて 低頭○ 俗ニイフ アタマノアカラヌセ

浜松物語一 しさみうを侍ゝみなみ渡めきてあそぶの

道にふをいまつゝくさかしきなるはおくまでやまざし

かひなん一の大臣后をちにとら川をとりくびしまへて

さむらう侍ゝみいまて いまは皇陽縣の をあと

なえて・となしめふ○

くものあみ 蜘蛛網

六帖 きふのおとひ 紀友則

くものあみに吹くる風はさむひとる人のおろかはいてなのほん

○

一

くらされて　クラマサシノ約○某ニクラマサレクト俗言ニイヘり

詞花雑下　公任

いにしへをこふるなみだにくらされておぼろにみゆる秋の夜の月

くもゐのあき

千雑下

くもゐのあきこそにさやけき月かけは十寄にあはつてこそみゆらめ

くわんぎよ　還御

中務日記　くわんぎよはちまつせて○同　多くこえたり

二

くわんせう　還昇

千雑中　還昇して侍りける人のもとに遣しける　藤原季経朝臣

うれしさをかさねの袖はてつむおもちかへらぬあはれのもとゐ

○職原抄　私抄環　翠軒　云殿上より地下へおりて又

殿上にかへるをしーの殿上人と云○　千神　大納言にも

還任して侍りけるかへらん○

六言

くれ里のあと　河海抄のうえ

源　若菜上　朱雀院の御くれ里のあとをあはれおもひきこえ給

西まめにちりて○同　あかし

くちやれうぬ

くちらかしぬ　口さかれさ之

業平　荒山 三十六　くちらかしぬ人を○同　同　くちやれうしぬをの

ゆきハ○同　まへの　くれ人は口やをうしぬをのゆくれまさむ○

くのえうり

源　絵合　くぬえうし海にゆきさ海に百ぶのほうをおほくる

ゐほう海て○業平　ちり荒 二十二ウ　是をや　いりへのくのえうく

ゆきいなてうにみてゐきてらのゐや　以れん○梅枝巻　公忠

的にのうにえりむつうし海つまりし　百ふの方ゆとわてむ

うちのえし
雲をうへに

えて○

くもぢあし　鍬枚足

宮つ保　ささうけ　あしでをみまたさきくものうし○新猿

楽記

くもゐうへし

全葉春　拾三四　春雨にぬまそて　堀河右大臣　宮のをんさくら花　雲のうへしめあしけふく

木のもとちてさむへき　えもいしとてやさくまの雲をうへにまいり風

後拾雜五　源景優母　ゐほうきやうやさの花ハあつ海ちのさちのえしの風に

えし　康資王母
金葉五下
天雲のかへしの風のおとせねハおもはましものきのみなれへし
清輔集
ここちき山なちもはもぬるあま雲のかへしの風を吹川風そ吹き
十二集　寒松　六百番
さえて松の雪をこえ行なりをのへの松の雪のうへをこえ
同
山さくら見にゆきつもる春風のふく花はなのうき雲の花
業兼根合
月詣

○続世継

雲のはて　涯

夕されハ雲のはてにおきてみふあまり川原みちにゆく人をみふらて
拾遺五四　ふく人かたか
吹風に雲のはてにハよそふともいつか身の清んにあはるらハ
雲鏡手の
ゆくせり
新朗詠　菅家
あさのはつはるハよしもこそかひかふ雲のはてもみえも色清さえなり
清輔集
七夕は雲のはてにて思ふらんまつみのあやもみれハ清さし
機に綾を
なせなり
○
くもはてなし　雲林院
千雑中　良暹法師
しせをち雲のはてなしにうちそとしてはかなられんみちかへをかは川
○

雲のふくろ

六帖 友則

吹風を雲のふくろにおさめつゝも人の心をいかゞおさめん

○

くものころも　雲衣

後拾雑上　堀河右大臣

七夕ハ雲のころもをひきかさねかへさでぬるやこよひなるらん

○新朗　七夕　まれそきの　下同○

くものきぬ　位袍

尚歯會記　くものきぬにあをにびのさしぬき○

くもらひ

後拾雑二　伊賀少将

つねよりもくもらしくもありし衣ぬれのころもをしたふかな

月詣集二　静縁法師

あまつかぜ花にいとふ春風のかすみぬや青柳のいと

七言

雲のうきはし

新古羇　業式部

水のうへにかげをうつして雲のうきはしかきたえにけり

○拭云　云旨云　うちかきといふ文字かへし文を雁書といひ

又紫雲ともうけいふへし

八言

くちのちにうくる

栄花 花山 四十 妻子珍宝及王位といふことをおほんくちのも
にうけさせのへたも○後撰雑二そこなれ人にのちにうけ
ていさらはとうらみ侍りける ことへ人ありし

衣とふちをちそつ狐のくちのちにかるや人を思ふなりけむ

金葉 銭をいてふ玄 後頼
あやしきもられしかりけるむかしそのちはなにかうと見えた 口見

丈本卅六

くらはにをのはく

栄花 八 衣珠 はくらはにその海きはとして○

九言

くちこきてもみたる

栄花 九 さかへのたちまひ 黄○小児の言え

くちこきてちこなるぬしたち

くみたみ元の神 国住初神○国常立尊をいへるう

万代神祇 躬恒
かくらふる人はむかしもあらやせしくみ咲そそめの神そ志うるむ

○

十言

九体(クウタイ)の阿弥陀佛(アミタブツ)

栄花 疑 あるときハ九体のあみた佛をつくらせ給ふ○

十一言

く川さ北御屏風(オンビヤウブ)

栄花 若水 おくつきの御屏風なと○

くれなゐのふてのすさみ

金葉 恋 文はかりおこせていひ絶にける人のもとにいひつかはしける 内大臣家小大進

ふみそめておもひかへりし紅のふてのすさみをいかてみせけん

新六 紅 衣笠 いくかへり染ていろまさきくれなゐの文みしあとも今はなみえつ

○毛詩 邶風 靜女篇 靜女其孌貽我彤管